図書館だより
文化学園図書館

文化学園大学・文化ファッション大学院大学
文化服装学院・文化外国語専門学校

No.152

2011年6月20日発行
東京都渋谷区代々木3～22～1
TEL.03-3299-2395
FAX.03-3299-2604

父母未生以前、人間本来面目

文化学園大学教授（経済学担当） 佐々木 秀一

3月11日に発生した未曽有の大災害により、私の実家のある宮城県石巻市門脇地区は筆舌に尽くし難いほどに壊滅してしまいました。海岸に近接していたために、津波による家屋の破壊とその後に発生した火災により辺り一面が火の海となり、周囲の住民のほとんどの方々は犠牲になり、懐かしい故郷は黄泉の国へと一変してしまいました。誕生以来の自分の存在を支えてきた時間と空間の帯に大きな亀裂と断絶が入り、これから先は闇だけが残っている感じがします。

この実家には90歳を超えた母が独りで頑張ってきていて、今回図らずも難を逃れることができたのは、縁の力によるものであると実感しています。これまで母はいわば独居老人生活で時には寂しい時もあったと思いますが、その毅然とした態度にはいつも心がうたれ、逢うたびに「人生の学び」について教えられることが多く、襟を正される思いがしてきました。

その母がこれまでに教えてくれた書物やいくつかの言葉の中で、特に記憶に残っているものに、「父母未生以前、人間本来の面目」というのがあります。この言葉は、夏目漱石の『門』において、主人公の宗助が生きていることの不安に苦しみ悩み、その救いを鎌倉の禅寺に求めたときに、そこで与えられた「公案」として知られています。文字通りにいえば、「父や母もまだ生まれていない頃において、自分の存在は何だったのだろうか」というようなことになります。とても奇妙な言葉です。父や母も存在していないのに、自分はいずこで何をしていたといえるのでしょうか。

漱石の『門』でも、主人公の宗助は父母未生以前という意味がよく分からず、とりあえず自分の本体を捉えることかと理解してその旨を言葉にすると、「もっと、ぎろりとしたところを持って来なければ駄目だ」と言われてしまいます。そしてそのぎろりとしたものは何かについての答えは、『門』の中では示されていないのです。母にこの言葉を教えてもらって以来いろいろと調べたり考えたりもしてきましたが、中々に納得のある答えを得ることはできませんでした。これについて、作家の早坂暁氏はかつて新聞の読書欄で、『門』の書かれた当時の時代背景から、武士道（特に、新渡戸稲造著『Bushido : The Soul of Japan』）ではないかと推測していました。

それが今回の大災害に直面し母のこともあり、なぜかこの言葉がありありと頭に浮かび、涙があふれて止まりませんでした。

＊＊夏目漱石著『門』 <文庫N>
＊新渡戸稲造著『Bushido : The soul of Japan』 <150/N>
＊『漱石全集』 <918.68/N/1～29>も所蔵しています。

C’est la vie（セ・ラ・ヴィ）

文化服装学院講師（情報教育担当）　西村　元良

この文章を執筆中の今は、別れと出会いの季節、桜が咲き新入生を迎え明るい時節を迎えているはずでした。しかし、3月11日金曜日、午後2時46分に三陸沖で大地震と大津波が発生した東日本大震災、この天災と人災被害の影響が私たちの日常生活に、大規模な影響を及ぼし、私の家も少しばかり被害を受け、我が書斎にある本棚からはすべての物が落ちて、足の踏み場もない状態となりました。散乱した部屋の整理を行い、本を一冊一冊本棚に戻しながら、これからの日本がこの災害により新たな時代に進むための問題として、被災地復興と放射能汚染の解決、今の私たちができること、またどのように対処しなければいけないのかと考えていると、整理しようとしていた一冊の単行本で「図書館だより」の執筆期限が迫っていることを思い出しました。この本の作者で「想い出の一冊」についての思いがめぐり、気持ちは38年前の高校生に遡ります。

当時、教科書以外の本とは無縁だった私と、「本」を結びつけたのが入学した高校の図書館でした。今でも、なぜ図書館通いをしていたのかきっかけは不明ですが……毎日放課後（部活動が始まるまでの40分ぐらい）は図書館に通い、読みふけった本がありました。作家は、五木寛之の『青年は荒野をめざす』から始まり、『ソフィアの秋』『わが憎しみのイカロス』『蒼ざめた馬を見よ』『樹氷』『青春の門』など……。たまに学校の帰り道にある書店で、庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』『白鳥の歌なんか聞えない』『バクの飼主めざして』を購読していました。いつの日からか単行本を選ぶ基準が、自分なりにできていました。まず「タイトル」にひかれ、次は「ハードカバーのイラスト」（なぜか昔から絵に対しての執着が強く）、読み終えた本はオブジェクトとして本棚に並べて置く習慣がつきました（今もこのスタイルは変わっていません）。本来であれば、少しほこりをかぶりセピア色に変色して本棚の隅にひっそりと置いてある本ですが、今は棚から落ちている「思い出の一冊一冊」に目を通しながら片付けをしました。ここで言うまでもなく、もちろん私は文学青年ではありません。当時は、サッカー（いまだに現役で楽しんでいますが）とスケボー·波乗りに明け暮れる青年期でした。そこで『青年は荒野をめざす』の一節の「人生とは何か」から本（小説）に引きこまれ、自分の人生とは何かと考え、また「男たちは常に終わりなき出発を夢みる」の言葉で自我意識が芽生え、自信と勇気を教わり、さらに「人生は何度でも新しく」の言葉で社会意識を感じ、挑戦と我が祖先の開拓精神を思い、当時高校生であった自分自身の人生観を大きく変えるきっかけとなります。その後の人生の中で学ぶ姿勢が変わり、学ぶ意識に目覚めたのが図書館通いから始まった一冊の単行本でした。『青年は荒野をめざす』のタイトルとカバーにひかれ読んだ小説が今の自分の原点となり、その後大人になって好きな言葉として選んだ「C'est la vie（それが人生だ）」は、自身の周りで起こる喜怒哀楽の時、いつも思い浮かぶ言葉……今回もこの言葉で、私の人生もまだもう少し、この先を歩んで行くつもりです。これからも、いつも楽しく「C'est la vie」。

*『ソフィアの秋』『蒼ざめた馬を見よ』<918.6/S/26>
*『青春の門』<913.6/I/1~5>
*『青年は荒野をめざす』<文庫I>

『傾城禁短気』

文化学園大学教授（文学·日本文化論担当）　近藤　尚子

大津街道に六兵衛という駕籠舁（駕籠の担ぎ手）がいた。相肩は同年代の七兵衛という男である。この二人が霜月（旧暦の11月）8日の嵐の夜、一人の男に「空駕籠ならば八丁（筆者補：大津の宿屋町の名）まで頼むぞ」と声をかけられた。ところがこの男、駕籠に乗る間もなく死んでしまう。その最期に言い残したのは、自分の肌着に小判千両と書付を縫いつけてある、それを二人にやるので柴屋町の歌仙という遊女を三百両で身請けし、残りは二人で使ってよい、ということであった。それをきっかけとして、七兵衛がかつて「関の万作」というお大尽であったこと、六兵衛も「米屋町の俵六」というお大尽であったこと、どちらもこの歌仙となじみであったこと、さらに二人とも「都立売の三大長者、予林静閑」の子であるということがわかる。異母兄弟が落ちぶれて偶然にも駕籠舁の相肩となっていたのである。そして死んだ男の懐の書付を読むと、この男は静閑の本妻腹の子で乙次郎といい、歌仙は静閑が召使の女に生ませた娘おかんであると判明する。妾腹であっても妹を遊女としておくに忍びなく、乙次郎が本家の金を盗み出して身請けをしようとしたのである。こうして4人ともに異母兄弟であることが明らかとなり、残された3人は出家して乙次郎を弔うのであった……。『傾城禁短気』第4巻第4話「教の駕籠に法の道連」という話である。幕末の黙阿弥を思い起こさせる波乱万丈の展開ではないだろうか。

『傾城禁短気』は宝永8（1711）年4月「作者八文字自笑」の序を付して刊行された。実はその3年も前から、八文字屋（江戸時代の京都の出版元）刊行の書籍にはたびたび『傾城禁短気』の広告が載せられていたがなかなか実現せず、宝永8年に至ってようやく刊行されたのである。遅延の理由は実作者·江島其磧と八文字自笑との確執にあったといわれている。本書の出版後、其磧は八文字自笑の下での執筆をやめ、一子市郎左衛門に書肆（書店）の江島屋を開業させている。

浮世草子は天和3（1683）年井原西鶴の『好色一代男』に始まり、ほぼ100年間にわたって出版された。最初の約20年は創始者である西鶴とその模倣の時代であるが、残りの80年は八文字屋本の時代とされている。この時期の八文字屋の消長は浮世草子の展開と深くかかわっている。二代目（あるいは三代目とも）八文字屋自笑は江島其磧を作者に迎えて役者評判記を、次いで浮世草子を出版し、人気を博した。元禄14（1701）年『傾城色三味線』が其磧の最初の浮世草子である。挿絵師には西川祐信を起用し、横本の体裁にするなど新工夫を施した。

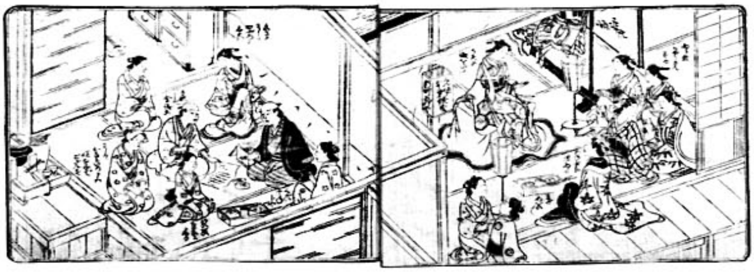
実作者の江島其磧は本名を村瀬権之丞という。寛文6（1666）年、京都の大仏餅屋に生まれた。縁者には大商人が多く、其磧自身も相当富裕な町人であったと思われる。匿名で浄瑠璃などを書いていたことから、自笑の代作者として執筆するようになったらしい。そして役者評判記でも浮世草子でも大当たりを取り、出版元である八文字屋は鶴屋·山本屋という老舗の正本屋を凌ぐようになる。しかし其磧の不満は次第に募り、先述のように『傾城禁短気』を最後に自笑と袂を分かつことになる。その後両者はそれぞれの出版物で相手を非難し続け、その応酬は享保3（1718）年までの7年に及んだ。

『傾城禁短気』はその其磧の代表作とされている。6巻6冊で各巻4話ずつ、計24話からなる。近世初期に起こった日蓮宗対天台宗の宗論を禁断義あるいは禁談義と呼ぶ。書名の「禁短気」はそのもじりである。また当時は三味線にのせ節をつけて庶民に教えを説くことが、幕府の禁令にもかかわらず流行していた。これも談義と呼ばれている。天正7（1579）年には法華宗対浄土宗の100年に及ぶ宗論の発端となった安土宗論が起こっている。こういった出来事や流行をふまえ、角書に「色道大全」とあるように「色道」の諸相を描いている。

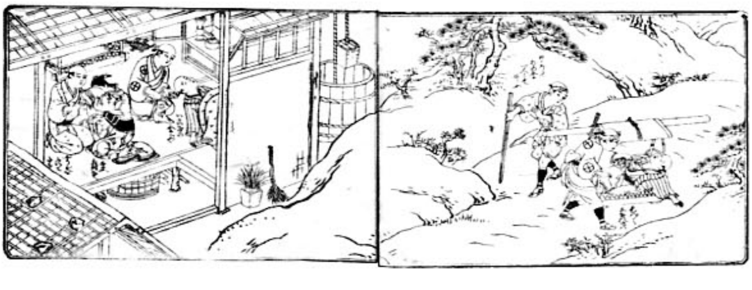
第1巻では翫色居士が女道門を広めるためにさまざまな色談を語る。第2巻では翫色居士とてれん上人らが婬乱居士を判者として男色女色の色論を展開する。この巻は第1話に「野傾の両宗あづち論」とあるように、安土宗論をやつしている。第3巻では「白人」と呼ばれる私娼の風俗が描かれる。第4巻は江戸・吉原寺において四十八夜の夜見世の説法という趣向で、女郎の短気を戒める。これが書名の「禁短気」の由来である。この第4巻の第4話が最初に触れた「教の駕籠に法の道連」である。第5巻では難波西横堀新町の新艘女郎に姉女郎が遊女として心得ておくべきいろいろな法を説く。第6巻では色里一遍上人が京島原に近い水薬師で色道五重相伝を行う。このように全巻が宗論や談義のパロディなのであるが、本文も他の其磧の作品同様、西鶴の剽窃に満ちている。「教の駕籠に法の道連」も実は西鶴の『好色盛衰記』の「仕合よし六蔵大臣」をもとにしている。しかし『好色盛衰記』では六蔵という馬方が客の男から千両の金を託されるところは同様であるにしても、その最期の頼みは「柴屋町の女郎狂いして我跡をとひ給はれ」ということであり、六蔵はその遺言どおり、千両の金で大臣（大尽）となる。本文は「今いふもふるけれども極まる所は金の世の中」と結ばれる。きわめて西鶴らしいが、一方の其磧はここに複雑な人間関係を設定して趣向を凝らし、ドラマティックな展開に仕立てている。

本館所蔵の『傾城禁短気』は奥付を欠くが、第6巻題簽小外題に「分里」の二字があり、早い版であると考えられる。最後に第5巻第1話、「難波の新艘水上の新談義」の挿絵を掲げておく。西川祐信の筆になる。衣桁に12の小袖を掛け、11人の女郎が衣裳を競いながら姉女郎の説法を聴聞するという場面である。

＊引用は『浮世草子集(日本古典文学大系91)』による



「難波の新艘水上の新談義」
『傾城禁短気　第5巻第1話』より



「教の駕籠に法の道連」
『傾城禁短気　第4巻第4話』より

学生に薦めたい3冊

文化学園大学准教授（健康心理学担当）　安永　明智

動物行動学、行動生態学の専門家である長谷川眞理子先生が書かれた『生き物をめぐる4つの「なぜ」』は、人間にかかわる学問を専攻する学生に、ぜひ読んでほしい一冊である。「4つのなぜ」とは、1973年に動物行動学の祖のひとりとしてノーベル生理学・医学賞を受賞したニコラス・ティンバーゲンが提唱した研究の枠組みで、動物の行動については、「引き起こす直接の原因は何か」「どんな機能があるから発達したのか」「一生の間にどのような発達をたどって完成されるのか」「進化の過程でどのような道筋をたどって出現したのか」という4つの異なる「なぜ」が存在し、行動の本質を理解するためには、そのすべてを解明しなければならないとされている。本書は、動物行動学の入門書であるが、人間も当然のことながら「動物の一種」であり、著書の中で述べられている4つの異なる視点からのアプローチは人間の行動や心理を探求する学生にとってきっと良いヒントを与えてくれるであろう。

『統計でウソをつく法ー数式を使わない統計学入門ー』は、現在も重版されている統計学の古典的名著である。著書の冒頭に出てくる「だまされないために、だます方法を知ることのすすめ」という言葉に表されているように、社会調査やマーケット調査で示される数字やグラフのレトリックについて書かれている。玉石混淆の情報が氾濫する現代社会において、情報を正しく読み取る力を身につけていくことは重要な素養のひとつであり、本書はその能力を伸ばしていくための一助となるであろう。また「サンプリング」「平均値」「因果関係」などの話については、アンケート調査を使って卒業論文を書こうとする学生にもきっと役立つと思われる。本のタイトルにも示されているように数学が苦手な人にも読みやすい内容となっている。

最後に『服従実験とは何だったのかースタンレー・ミルグラムの生涯と遺産ー』を紹介する。本書は、ユダヤ人の大虐殺が起きたメカニズムを理解するために行った服従実験や知らない者同士が6人の知り合いを介してつながることを立証したスモールワールド実験で有名な社会心理学者のスタンレー・ミルグラムの一生を描いたものである。ミルグラムの研究は、倫理面からは批判されることが多かったが、その独創的な発想とそれを証明していくための実験手法は私たちにとっても非常に参考になるであろう。本書は、ミルグラムの行った数々の実験をわかりやすく描くとともに、人間的部分についても深く描写してあるので、心理学を専攻する学生でなくても楽しめるであろう。

今日では、ひとつの問題に対して、複数の学問領域からアプローチしていく学際研究が多くなっている。学生の皆さんには、専門領域の知識を深めていくと同時に、周辺分野の知識も幅広く身につけていくために、文系、理系、フィクション、ノンフィクションの枠にとらわれず、多くの本を読んでいくことをお薦めする。

*長谷川眞理子著『生き物をめぐる4つの「なぜ」』
集英社新書 2002 <481.78/H>
*ダレル・ハフ著　高木秀玄訳『統計でウソをつく法
ー数式を使わない統計学入門ー』講談社 1968 <350.4/H>
*トーマス・ブラス著　野島久雄、藍澤美紀訳
『服従実験とは何だったのか
ースタンレー・ミルグラムの生涯と遺産ー』
誠心書房 2008 <289.53/M>